

平成28年度 百年の杜づくりフォーラム 議事録

日時：平成28年10月25日（火）

18：00～20：00

場所：せんだいメディアテーク

1階オープンスクエア

事務局（司会）

皆様、おぼんでございます。

本日は、平成28年度百年の杜づくりフォーラム「公園と人がつながる、まちのにぎわいづくり」にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

本日の司会進行を務めさせていただきます仙台市建設局百年の杜推進課の中川と申します。どうぞよろしくお願いたします。（拍手）

それでは、開会に当たりまして、本フォーラムを主催いたします仙台市を代表して、稲葉信義仙台市副市長よりご挨拶を申し上げます。

稲葉副市長

おぼんでございます。

今日はあいにくの雨模様の中、当フォーラムにご参加をいただきまして大変ありがとうございます。

仙台市では、平成11年に百年の杜づくりという大きな事業構想を打ち出しました。これは、特に戦後60年ぐらいで仙台市内の緑が、やはり高度成長を続ける中でかなり大きく毀損をされてきたため、これを何とか復活をさせたいという当時の思いで、「百年の杜」という言葉をつくりました。これは、今後100年の仙台のまちの将来像を見渡して、その中で緑の復活をさせ、緑と市民の新たな関係をつくっていくものです。そして、事業の一環で平成19年から、市民の皆様と我々行政が一緒に学ぶ、いわば勉強会としてこの百年の杜づくりフォーラムというものを実施してまいりました。

近年、公園に限らず、道路でありますとか様々な社会的なストック、これを有効に活用する動きがあります。それから、国全体が人口減少していく中で、そういう社会的なストックをどんどんつくっていくという時代は、だんだんもう終わってきておりますので、どうやって長寿命化をするか、どうやって有効に活用するかというようなことを国全体で考えていく、そういう時代になってきたなというふうに思っております。

今回の百年の杜づくりフォーラムでは、緑あるいは公園と市民とのかかわり合い、都市のある意味装置にもなり得る緑あるいは公園と市民の皆さんがどういうふうにかかわり合

って、その中でどうやってまちのにぎわいをつくっていったり、そういうことを模索をしていくかというようなことに関して、ぜひ皆さんと一緒に勉強してみたいということで企画をさせていただきました。

今回、全国的にも各地で様々なそうした視点で活躍をしておられる方々にも、パネラーとして、ご参加をいただいておりますので、市民の皆様にも、今日の中で、新たな発見や気づき、今後の仙台の緑を考えていく上での大きなヒントをいただけるのではないかなど期待をいたしております。

あいにくの雨の中でございますが、皆様にとって有意義な時間になりますことを祈念申し上げます。簡単ではございますが開催に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。

本日は本当にご参加ありがとうございます。(拍手)

事務局（司会）

ありがとうございました。

稲葉副市長は公務のため、ここで退席をさせていただきます。

続きまして、仙台市百年の杜推進課の三浦より、本フォーラムの主旨説明を行います。皆様、スクリーンのほうをごらんください。

事務局

皆様、おぼんでございます

それでは、私から、本日のフォーラムの主旨説明をさせていただきます。

まず初めに、皆様にお配りしましたチラシの一番上にも書かせていただきましたが、私から皆様に1つお考えいただきたいことがあります。あなたにとって、公園はどんな存在でしょうか。

もし私が誰かにこの質問をされたら、「心が落ち着く場所」と答えると思います。

そして、ただ静かな空間というだけでなく、「人の温かみのある空間」というのも重要なポイントです。子どもたちの遊ぶ声が聞こえたり、1つ隣のベンチに誰かがいて、見ず知らずの誰かと同じ空間を共有できるということが、1人でのいるよりも落ち着くような気がします。

さて、公園といっても様々ですので、なかなかイメージしにくいと思います。仙台にはどのような公園があるのか簡単に紹介させていただきます。

まず1つ目ですが、「まちのなかにある公園」です。写真はこのメディアテークからも近い青葉区の西公園の写真で、10月23日に行われた西公園まつりの様子です。このようなまちの中の緑は、とても貴重な存在です。

2つ目ですが、「子どもたちの遊びの公園」です。写真は、青葉区上杉の勝山公園です。皆様のおうちの近くにも遊具の設置された小さい公園があるのではないのでしょうか。

3つ目は、「まちの近くにあるみどり」です。写真は、青葉区国見にある仁田谷地緑地で、市民団体の方が管理活動に参加してくださっています。仙台は、市街地からすぐの場所に緑豊かな土地が広がっているのも特徴です。

これらのように仙台市内には色々なタイプの公園があり、様々な利用がなされています。皆様にとって公園はどういった存在でしょうか。

さて、次に、公園のボリュームについて考えてみたいと思います。

公園のボリュームを示す値として1人当たりの公園面積というものがあります。計算上では、仙台市に住む1人当たり14㎡を自由に使えるという計算になります。これをわかりやすく考えると、畳7.5畳分ということになります。これは、政令指定都市の中でも5番目で、全国的にも多いほうです。

これらの公園には、どういった役割があるのでしょうか。

今まで説明してきた公園には、大きく2つの効果があります。

1つ目は存在効果といいます。これは、公園があるだけで起きるいい効果です。公園があることで、まちの骨格がつくられたり、いざというときの避難場所になったり、心が安らいだり、地元愛を育んだり、公園があることで、生活環境がよくなり、周りの不動産の価値も上がったりします。

2つ目は利用効果といい、公園を使うことで起きるいい影響です。健康づくりや子どもの遊び、スポーツの場となるとともに、人々のコミュニティづくりにも一役買っています。

2つとも大切な公園の効果なのですが、今回のフォーラムでは、この利用効果に着目し、もっと公園を上手に使いこなすことで生まれる「まちのにぎわいづくり」への提案を行いたいと思います。

この写真にあるように、もっと公園を上手に使うことができれば、私たちのまちは、もっと素敵になる可能性を秘めています。

今日は公園でどんなことができるか、このフォーラムを通じて一緒に考えてみませんか。

最後に、ここで皆様にお願ひがあります。このフォーラムを聞きながら、ご自身がどこの公園でどんなことをしてみたいか、思いついたことをアンケートにご記入いただけないでしょうか。皆様のご意見を参考に、これからの公園づくりに生かしてまいります。

これで主旨説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

事務局（司会）

ありがとうございました。

それでは、これより基調講演に移りますが、初めに本日ご講演いただく舟引敏明様のご紹介をさせていただきます。

舟引様は、1979年、建設省に入省後、日本各地の公園行政に携わり、1995年、阪神・淡路大震災の際には兵庫県西宮市に出向されておりました。その後、国土交通省都

市局公園緑地・景観課長、大臣官房審議官（都市生活環境担当）を歴任され、今年より宮城大学事業構想学部の教授としてランドスケープに携わる学生の指導をされております。

本日は、舟引様より「百年の杜の資産を活用する—公園の秘密は『オープンスペース』にあり！？—」と題してご講演をいただきます。

それでは舟引様、お願いいたします。

基調講演

「百年の杜の資産を活用する—公園の秘密は『オープンスペース』にあり！？—」

宮城大学事業構想学部教授

舟引 敏明 氏

舟引 敏明氏

舟引と申します。ご紹介いただきましたようにずっとお役所で仕事をしておりまして、この4月から仙台に参りまして、住んでおります。市民です。

来たことはもちろん何回もありますが、住むことになったのは、もちろん東北地方でも一番最初の経験であります。役所というのはいろいろなところに行くので、今まで福岡市に5年ほどいました。それから、広島にも5年近く、あとは関東周辺、それからさっきありましたように西宮というところにもいました。したがって、仙台はまだようやく半年がたったばかりであります。比べてどうかというと、今のところ、そんなに不安、不満があるわけではありません。

さて、そういう意味でよそ者が仙台のまちについて話をするというちょっとおもしろいことをやります。

皆さん、この景色、どこの景色かわかりますか。何か、わかるような気もするけれども、どこから撮ったんだろう。窓、どこかのビルの窓から撮ったのかなと思うかもしれませんが、こうするとちょっとよくわかるかもしれません。わかりますか。これは新幹線のホームです。新幹線のホームはアクリルガラスになっていて、ずっと青葉通りが見えるようになっています。ちょうどこれは東京、上りホームから撮ったので、下りホームですから、ちょうど降りた人があれを目にする。私も降りて、あの景色を見て、大概ちょっとびっくりしました。これが仙台の最初の印象です。何だこういうのって意外に皆さん気がつかないかもしれないけれども、他にはないんですね。

さて、私、今日は30分しか時間がありません。なぜなら、遠来のお客さん方にたくさん喋ってもらわないといけないので、ちょっと早口で、途中飛ばしていくかもしれませんけれども、そこはご容赦いただきたいと思います。

ちなみにこのタイトルも、さっき主旨説明をした三浦さんが考えていただきました。中身とちょっと違うかもしれませんが、おもしろくやっていきたいと思います。

さて、「百年の杜の資産を活用する」というタイトルで、まず百年の杜の資産の話を半分。これ仙台の人に、なぜ仙台の緑の歴史の話をするというのは、ちょっとおこがましい話ですし、後で出てくる西公園は、今日のパネリストの榊原さんのフィールドワークの場所ですけれども、それも含めて、なぜ今公園で、緑でこんなふうに遊んだほうがいいのかなという背景を説明をいたします。

この間、角田高校というところに行って、うちの大学受けませんかということで授業をやってきました。そのときに「杜の都」ってみんなどういうイメージと聞いて、これをぱっと見せると、みんな10人が10人、みんな「うん」とうなずくのです。でも、この間「ブラタモリ」という番組を見ていると、実は杜の都仙台は違うんだと。伊達の殿様が云々という話、昔の武家屋敷の緑が残って杜の都だという話。さっき本屋を見たら「ブラタモリ仙台版」というのが売っていましたね。テレビを見て、本をご覧になった人もいるかもしれませんで、そういうイメージです。

それで、なぜ公園の話かです。明治6年に、実は日本の近代公園の歴史が始まりました。太政官という、今でいうと内閣総理大臣が法律をつくって、人民がたくさん集まって、古来の名勝区、いいところ、名勝とかそういう人が集まるところを公園とするべしと、それでできたのが西公園です。だから、西公園が日本で一番最初にできた近代公園かというのと、ちょっと違うのです、実は。日本で一番古い近代公園、これは全然余談ですけれども、横浜の山手公園と神戸の東遊園地。今日は村上さんがお話しになりますが、外国人居留地の中に、外国人の遊び場として、憩いの場としてつくったのが日本の近代公園の最初ですので、今日は先輩に敬意を表してご紹介しておきます。

それで、西公園の歴史をスライドに書きました。明治8年にできて、明治14年、博覧会があって、官設勸工場、これは見本市会場みたいなものです。そういうのができて、これは挹翠館（ようすいかん）と読むんでしたか。集会場ができて、高等小学校ができて、公園っていろいろなものがどんどん建ってしまうんです。お隣に偕行社、陸軍の施設だとか常盤木学園などがいっぱい、公園も含めて融通無碍にいろいろなものができます。それが全部、昭和20年に燃えてしまいます。燃えてなくなって、今度は公営住宅が建ちます。ただ、戦災復興のさまざまな事業の中で区域を倍ぐらいに拡大して、その常盤木学園だとかそういったものがあつた場所が今の公園の区域になったということです。その後もプールができたり、天文台があつたり、図書館ができたり、いなくなったり、市民会館があつたり、西公園というのは本当に数奇な運命をここ150年間、たどってきています。

さて、何でこんな話をしたかというのと、この戦災復興というのが、杜の都仙台の今の、高校生が思っている杜の都仙台をつくり上げました。戦災地復興計画基本方針を策定したときに街路、道路というのは、そのころ自動車なんか普及していないにもかかわらず広い道路をつくりました。その広い道路は何かというと、スライドの上のほうにある防災とか、保健、美観とか、そういう美しいものに資することを指しています。下のほうにあります

けれども、パリのシャンゼリゼというのはブルーバールという公園道路という概念、そういうものをそのときの都市計画の先人たちはヨーロッパで見てきて、あれを日本につくらなければいけないということを明確に国の方針として打ち出しました。それで、全国150都市ぐらいこの戦災方針でやったのですが、これが仙台市の区画整理の図面です。もう大体これ説明する必要はないかと思えますけれども、横に青葉通、広瀬通、定禅寺通と広い幅員があるのがおわかりかと思えます。

そのときの街路の幅員がありますが、これが定禅寺通り、4本の樹木、今そこに並んでいるわけです。ちなみに植えたのは昭和33年で、ほぼ私と同年くらいなんですね。これが青葉通り、3列のケヤキ並木という。こういうものをつくって今の仙台があります。西公園も今、黄色いサインが出ました。これが公園の図です。勾当台公園のところ、ここありますけれども、今と形が違っていています。なぜか。地下鉄通すときに道路もクランクをやめて真っすぐ通して、公園も変更しました。これは余談です。ちょっとだけ参加しました、そのとき。

それから、戦災復興でちょっと例を挙げてみたいのが広島です。広島、ここわかりますね。これは100mの道路です。それから、公園がこんな感じで、広島のすごいのは、この川沿いのところ、これ全部オープンスペースに、この戦災復興で、家がいっぱい建っていたところをひっぺがしました。その結果、現在の広島市を見ると、このあたりを見ると、全部緑色になっているのおわかりかと思えます。これは日本でもなかなか珍しい、川まで、堤防をおりていくのではなくて、堤防ごとそのまま使っているような話。これは平和記念公園ですね。この下が今さっき言った平和大通りの100m道路、見たらわかりますね。100m道路がどうなっているかという、こんなふうになって、やっぱりこんなふうに使っているんです。これはフラワーフェスティバルというお祭りです。ただ、ちょっと仙台と違うのは、真ん中に広い道路をとってしまって、両側に緑地帯分かれているので、ちょっと遊ぶときに使い勝手が悪い。真ん中、さすがにこれに車をとめるのは、この隣の祭りのときぐらいしかとめられないということ。

同じようにこれは鹿児島です。これも戦災復興で50mの通りをつくったものの写真です。

ただ、今のは成功例を言いました。東京は同じようにやりました。でも、やめました。やってません。できてたら、今ごろもうちょっと綺麗な街になってます。だから、戦災復興でうまくいった大都市というのは、今紹介した広島と仙台ぐらいなのです。名古屋の広い通りありますけれども、せいぜいその3つぐらい、そのぐらい貴重な価値のある緑をよくここまで頑張って残してきたなというのは、中の人は意外に知らないかもしれないけど、全国的に珍しいのです。だから、新幹線の駅のホームであれを見ると、ちょっとびっくりするわけでありませう。

昭和31年、これも私の生まれたころですが、都市公園法ができました。さっきの西公

園のところを思い出していただくと、公園って何でも、学校もできてしまう。住宅も建ててしまう。使い勝手がいいわけです。空地（くうち）とも言いますが、空き地とも読みだりするので、それで昭和31年に公園法ができました。なぜここで公園法の説明をするかという、多分皆様方公園使っている中で、お役所は何て固いんだろう、もうちょっと好きに使わせてくれればいいじゃないかという人がたくさんいると思いますけれども、なかなかそうもいかない原因がこれです。都市公園法では、もう公園につくっていいもの名前を全部書きました。だから、名前を書いたものでないとできない。だから、学校をつくれないことになりました。オフィスもできません。そういう工夫です。それから、やっぱり広場がなくてはだめです。お空が見えて、建物で埋め尽くされたらちょっと悲しいですね。そういうことで、やっぱり公園の秘密はオープンスペースだと、後で先生方皆さんそういう話になると思います。それから、つぶしてはだめという宣言までしました。このぐらいガリガリしたことをやらないと、その当時、昭和20年代の混乱のときには公園ってできなかったんです。ただ、そこでこの法律をつくったがゆえに、今の公園が守られてきたとも言えますし、お役所が固いことばかり言うのも伝統としてそこで残るということであります。ちょっと弁護しておいてあげます。

もう一つは、もともと公園って、物見遊山の地を公園にすると一番最初に言いました。だから、最初から売店もあれば茶店があって、場合によっては、京都ではいまだに円山公園の中に行くと旅館があります。本当はだめなんですけど、法律ができる前からあったものは一応とりあえずセーフと。だから、そういうのが自由にできるように、もちろん建物を建てたらつぶれちゃうからだめなんだけれども、その範囲内であつたら建物を建ててもいいし、いろいろなことができるような仕組みになっているということ、とりあえずはまず皆様にお知らせしておきます。

ただ、緑というのはそういう公園という施設だけではないです。仙台市は平成9年に緑の基本計画をつくりました（※仙台市緑の基本計画「仙台グリーンプラン21」は平成9年度策定）。これは何をするかという、公園つくるより、まず残っている緑を守りましょう、そっちが優先するべきではないですかという話の一つ。それから、どんどん緑化するんだつたらお手伝いしましょう。それでどうしても拠点が必要とかだったら、土地買ってでも公園つくりましょうというような仕組みに転換して、実際、百年の杜では、緑化をすると、震災以降ですけれども、お金をくださる。緑地を保全すると、そこの管理のお金を多少助成するという仕組みになって、それトータルで緑を守る。そんな緑を金かけて残しているわけですから、何かうまく使いたいですよねというような話になります。

では、資産を活用する。ここからはスライドが大してないので。では資産を活用するというのがどういうことかしらというので、ちょっとだけお役所の事情を話します。公園、さっき畳の表現、あれは初めて見ましたね。畳の部屋で公園面積表現してましたけど、面積がふえるとどうなるかという、維持管理にお金かかるんです。人より立派だったら、

その分お金がかかります。仙台市見ていると、街路樹が立派というのは、その分、落ち葉を処理する費用が物すごくかかるので、でもやっぱりそこはちょっと頑張ってください。ただ、一方で財政からは、お金がないのでちょっとどうにかしろよといってファシリティ・マネジメント、これは公共施設を、特に箱物をどうにか少し減らせないかとか、P R E、不動産としてさまざまなものをもっと活用できないかというのが、仙台市の公園部局も色々きつと言われていていると思います。

そうなるかどうかというと、皆さんの力を借りないと手が回らない、金が回らない、首も回らないということになって、そのときに当然、皆さん今までは市民参加という形でお手伝いをしていただいたのですけれども、当然今、企業だってC S R、地域貢献活動、社会貢献活動をしなければいけないというような時代にもなっています。また、収益だっでどんどん上げていただいて構わない。それから、N P O初め、パブリックサービスを支えるような動きもたくさん出てきていますので、そういうものの活用をどんどん。そのためにはあまり固いことばかり言ってられないですよという話。

さっき言った仕組みもどんどん変えています。(PFI 事業について)平成15年、もう10年前に一番民間事業者が公園で施設をつくる場合、いろいろと条件があったんですけど、ここで公園の機能が増進する場合だったら何でもオーケーという、ほとんど何でもあり。市がうんと言えはですけど。また指定管理者という仕組みもできました。そういうどんどん仕組みのほうは用意できているので、さあ、じゃあ次にどういうふうに皆さん方に参加していただく、これがお手伝いと言ってはだめなんですね。きっとパートナーとして一緒にやってもらうぐらいの雰囲気、雰囲気というか関係でないと、多分首も回らない、手も回らないということになって、そういうのを最近では、パークマネジメントという言い方をする方々がたくさん出ています。

ただ、名前は一緒だけれど、公園によって大きさも違えば場所も違うので、当然やっていることはみんな違います。今日はそういうことをゲストでいろいろお話を聞きたいと思いますが、ただ、一言で言うと、せつかくある不動産、公共の財産なんだから、最大限価値を。この価値というのも難しくて、行政側にとってみての価値よりは、市民の皆様方にとっての価値というほうが大切なのではないだろうかということで、どうもお役所、すぐ上から目線で物を言いますけれども、パートナーとしてどうやってもらうかということかなと思っています。

ただ、その際に役所として結構難しいのは、やっぱり参加してくださる方々、パートナーに対して、どういう考え方でこれやっているんですよという基本的なコンセプト、考え方をきちんと明示し、共有する。例えば長寿命化は、施設を管理する側にとってみれば長寿命化という言い方をするのだけれど、使う側にとってみれば、長寿命であろうが何であろうが、安全で使いやすければいいわけですから、そこの視点をちょっとひっくり返さないといけない。今、仙台市でもそういうマネジメント指針をつくらうという努力をしてい

らっしゃるようですから、ぜひ皆さんもどこかで参加するプロセスがあると思いますので、口を出していただくことが大切です。

2番目が、役所的に言うと、やっぱり効果というのが大切なので、コストパフォーマンスをよくしろと、最近は言うわけです。でも、公園の利用価値って、そんな簡単に金ではかれない。仮に真面目にはかろうとすると、結構面倒くさい経済的な試算をしたりなんざしなければいけないので、仙台モデルみたいなものが何か必要です。これがないと、安い人が請け負えば安く管理できてしまうんです。手を抜く、金かけない、草ぼうぼうになる。それでだんだん悪くなるという、だからそれではだめで、やっぱりそのためには、パートナーと参画というより、今度、技術としてそれはちゃんと残していかなければいけないので、プロがつかなければいけない。だから、プロも参加して、パートナーが参加するというような話をやっていかないといけないわけです。

こういう市民、企業という人たちが参加をして公園をマネジメントする。それをさらにエリアに、地域に広げていくというようなことが、多分これからの社会の中では重要な話で、参加することがより楽しくなるのではないだろうか。それで色々おもしろいことも最近ちょろちょろ出てきています。

これは新宿中央公園で指定管理者、そののみちのく杜の湖畔公園を管理している公園財団というところがやっているのですが、新宿中央公園ってご存じですか。都庁の裏側にあって、ちょっと前までは青いテントが山ほどあって、酔っ払いのおじさんがごろごろ寝てたりして、昼間でも行くとちょっとアルコール臭いにおいがして、あんまり行きたくない雰囲気のところだったのです。ここで公園を管理するプロ集団が指定管理者を請けました。請けたそのときの現場の所長さんは、ホームレスさん一人一人に話をして、どういう形で住み分けているのかディテールはよくわかりませんが、パーティーをやったり、子どもさんたちがたくさん来る。だから、東京都庁の都心の下にふさわしい公園に生まれ変わるというようなこともあります。

写真はありませんが、セントラルパークも、30年ぐらい前は、あそこに入ると身ぐるみ剥がれて、場合によっては命ないぞというような評判が立っていたようなところでした。同じように30年前に管理財団というのを設立して、いろいろと寄附金をもらったり、イベントを仕組んだり、会員で会費払うと特別にイベントを呼んだときにゲストサービス券を送ってくるとか、そういうようなことをして、人がたくさん来て、お金が潤沢になると、今ニューヨークに行くと、セントラルパークが物騒だという人はほとんどいなくなりました。

それから、企業もいろいろなことをやります。これは大手森という東京の都心にできたところなんですけれども、本当にハイテクな緑化の技術を使って森を高層ビルの間につくりました。これは当然のことながら一般に開放しています。そういう企業のプレーヤーというのが出てくれば、もっとおもしろくなる。なぜ、こんな人たちが出てくるかというと、

オープンスペースつくったらお金もうかるんです。なぜか。客が来て、床の単価が高くなる。床もふえるといろいろだとか、これはパネリストの佐藤さんのパートナーの西武さんがやっているところですけども、「飯能西武の森」。これはちょっと開発に失敗しちゃった土地、持っていてもしようがないので市民に開放して、みんなで遊ぶ場にしちゃったというそういうなかなか稀有なところですよ。持っているとみんな会社の中で怒られるんですけども、みんなに貸して、公表して、新聞に載ったり、ニュースに載ると褒められるという不良債権を打って返しをしたというような事例です。

この写真は、仙台の人ならみんな知っています。泉パークタウンというところ、これは三菱地所さん、これこそブルバールのコンセプトをニュータウンの開発の中でやった例です。エリアマネジメントというあれですけども、イメージが下がらないように、住んでいる人からやっぱりお金とって、きちんと生け垣だとか緑を管理していますし、この両側のメタセコイヤのところは、通常だったら市に管理委託するんですけども、自分たちで、ただ市にやったら草ぼうぼうになるかもしれないと思っているのかもしれないけれども、管理している。そういう緑の管理だとかそういうものがつながって、少しずつエリアにマネジメントを広げるといようなことも、価値の最大化といようなことにつながるんだと思っています。

こんなことで元気になってほしいなと思うんですが、最後にちょっと余分なことを申し上げますと、仙台には実は元気になってほしいんです。この間、都知事選で小池さんに負けちゃって落っこった元岩手県知事の増田さん、この書籍「地方消滅」は結構有名になりました、全国のまちがどんどん消滅するぞと。その増田さんが、その処方せんの中で言っているのが、要は仙台、東北で言うと仙台にちゃんとダムをつくって、仙台が魅力があれば、そんなに東京一極集中にならないのではないだろうか。そのためには若者に魅力がある。一定の楽しいアミューズメントと都市的なサービスができる。そういうようなことで付加価値をつける。そうすると、やっぱり仙台がもっともっと楽しくおもしろくなくてもらわないと、東北全体のためにならない。

もう一つは、もっとグローバルな話です。このアトキンソンさんというのは、ゴールドマンサックスという証券アナリスト会社で日本に来られて、15年ぐらい活躍してたんですけども、リタイアして京都の町家にお住みになっている。そうすると、地元の人に頼まれて、文化財の修復会社の社長さんになった。テレビにもよく出てこられるからご存じの方もいらっしゃると思います。この人に言わせると、日本はまだまだ魅力があるんだ。魅力の磨き方が下手くそだから、人が来ない。ちなみに、この人が言うには、パリには1年間で8,500万人観光客が来るのです。日本全国でやっと2,000万人超えたといって大騒ぎをしますけれども、これから人口が減ると、稼ぐ金のお金の総額、いわゆるGDPが減ってくるときに、やっぱり世界の観光産業が大切になってくる。イギリスだと9%近く観光関連産業が占め、お金が落ち経済が回っている。こういうためにも「杜の都

仙台」。いいですよ。これは多分外国人の人にも通じるとは思います。そういう楽しい魅力が必要になります。その人が言っているのは、おもてなしというのはだめだと言っています。何でだめかわかりますか。おもしろくない映画がかかっている映画館が幾らきれいでも観に行きますか。行きませんよね。幾らきれいでも、食べ物のまずい料理屋さんは何回も行きますかと、行かないんです。だから、サービスがよくたって、コンテンツ、中身がないことにはどうしようもない。そのためには、気候だとか、自然だとか、文化だとか、食べ物が重要だと言っているんです。したがって、そういう素材はたくさんありそうですね。それをどうやって磨くか。その一番大切な都市の環境を70年前に、不幸な戦災は受けたけれども、広島だとか仙台は贈り物をここでもらっている訳です。そう思ってもっともっと、東北のため、そして日本のために仙台頑張っていたきたいというところ。やっぱり定禅寺通りでお祭りやっているところ。車とめて、これは春の青葉まつりのときにみんなすずめ踊り踊っているところですけども、こういう楽しいこともやれているので、仙台はどっちかという先進地です。これからは遊ぶほうのプロがお三方おそろいでございますので、そちらの方に楽しい話を伺っていきたいと思います。

私のほうはこれで終わりいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

事務局（司会）

舟引様ありがとうございました。

戦災復興計画や都市公園法と、あと国内、海外の事例もご紹介いただきまして、そういった公園・緑を使いこなすことで、まちのにぎわい、ひいては価値が形成されていくプロセスとかビジョンをわかりやすくご解説いただきました。素敵なお講演ありがとうございました。

いま一度、舟引先生に大きな拍手をお送りください。(拍手)

ありがとうございました。

それでは、続く、パネルディスカッションの前に会場の準備がございます。ここで約5分間の休憩をとらせていただきます。

なお、お席を立たれる際は、貴重品等はお手元にお持ちください。

再開は18時45分を予定しております。ちょっと休憩短いのですが、お時間までにお席のほうにお戻りください。

また、会場の皆様にご案内です。本メディアテークのこちらの会場のオープンスクエアに隣接しておりますKANEIRI Museum Shop 6様において、本日の講師の方々にご紹介いただきました書籍やパークマネジメント関連の書籍の販売を行っております。こちら営業時間が20時までとなっておりますので、ちょっと休憩時間短いのですが、皆様是非ご覧になっていただければと思います。

パネルディスカッション

「公園を拠点としたまちのにぎわいづくり」

事務局（司会）

ご来場の皆様にご案内いたします。間もなく百年の杜づくりフォーラム、パネルディスカッションのほう再開いたします。お席にお着きいただきますようお願い申し上げます。

皆様お待たせいたしました。

それではただいまから、「公園を拠点としたまちのにぎわいづくり」と題しまして、パネルディスカッションを進めてまいります。

それでは、パネリスト4名のご紹介をさせていただきます。

まず初めに、ステージに向かって左側、佐藤留美様でございます。（拍手）佐藤様は仙台市のご出身で、現在は東京を舞台に活動されています。特定非営利活動法人NPO birth設立後、パークレンジャー等の縁にかかわる仕事を新たに生み出し、2006年からは企業と共同で公園の管理を行われています。現在は東京都西部の17の都立公園と、西東京市の50の市立公園の管理運営業務に携わっていらっしゃいます。

続いて、村上豪英様でございます。（拍手）村上様は、地元神戸を舞台に現在活動されています。今年度、一般社団法人リバブルシティイニシアティブを設立し、都心に広がる公園を市民のアウトドアリビングとしてもっと大切に使うため“アーバンピクニック”を開催し、都市と自然を同時に楽しむ神戸らしいライフスタイルの発信を行っていらっしゃいます。

続いて、榊原進様です。（拍手）榊原様は、2002年に特定非営利活動法人都市デザインワークスを設立後、仙台を拠点に市民主体のまちづくりを実践・支援されています。現在は広瀬川一帯を「せんだいセントラルパーク」に見立て、魅力的なパブリックスペースを楽しむためにピクニックパレードやプレジャーマーケット等を企画運営し、まちづくりから見た公園のにぎわいづくりを実践されています。

そして、仙台市からは建設局百年の杜推進部公園課長岡田真之が参加いたします。（拍手）ファシリテーターは、基調講演に引き続き舟引様にお願いいたします。

それでは舟引様、よろしく願いいたします。

舟引 敏明氏

それでは引き続き。さっき一生懸命急いだのは、ここで皆様の話を長く聞いてもらうということが目的であります。

仙台市の岡田課長にご参加いただいているのは、そのお三方から行政の悪口をちょっと言ってもらって、その言い訳をする係としてここに壇上に上がっていただいておりますの

で、どんどん悪口言っていたいただいて構いません。

では、順番に、大体お一方10分ぐらいの予定だそうですので、佐藤さんからお願いしたいと思います。

佐藤 留美氏

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました佐藤留美と申します。私からは、緑の力はまちの力になるぞということで話題提供させていただきます。よろしくお願いいたします。座って失礼いたします。

実は、私、仙台出身ということなのですが、この徒歩数分のところで生まれ育ちました。こちらせんだいメディアテークですね。私の生家はここ、すぐ近く。実はここで材木屋のおじいちゃんが営みまして、住んでいたのですが、映っているのは晩翠通りのイチョウですね。幼稚園はこちらです。そして小学校、中学校、高校ということで、この辺は私の庭のようなところなんですね。

ではどこで私は遊んでいたかなとちょっと思い出してみたんですが、やはり家の周りの公園です。ちっちゃい公園ありました。それから、実は市役所も遊び場で、これは勾当台公園です。ハトの餌やってみました。あと小学校の隣の公園(北三番丁公園)があって、今ボランティアさんがお花きれいに育ててらっしゃるのですが、私が遊んでいたときはお花全然なくて、かわりにおでん屋さんが毎日来てました。おでん食べてました。そして、西公園は本当に広くて、いろいろな遊びをしたり、ロケット花火大会とか、ちょっと迷惑かけてたんですが、あとSLです。SLが今もあってすごくうれしいんですが、すごく乗ってました。あと河原でも遊んだりとか。それとこっちの下のほうなんですが、長沼(青葉山公園)って長い沼なんですけど、ザリガニ釣りしてました。それから、ちょっと上のほうにも上がって、東北大学のところの裏に秘密基地みたいな場所があって、ここですごく遊んでたんですが、皆さん、知ってらっしゃる方いないですよ、きっとね。ちょっと昔の写真なんですけど、これ私なんですけど、ここどこかわかりますか。市役所の芝生なんですよ。今だと入っちゃだめとか言われそうなんですけど、後ろにあるのは勾当台公園の森です。これはうちの前なんですけど、晩翠通り、法務局、昔の昔の法務局だったり、市役所変わらない。すごい市役所と思って。全然変わらない。そして、ここ、きょう西公園歩いてきて、同じ場所見つけたんですが、変わってない、西公園。西公園には図書館があって、池(心字池)があって、毎日オタマジャクシをとりに行っていました。あと、実は一番よく遊んでたのが、これうちの前、法務局、これは新しくなった法務局ですね。これは小学校1年生なんだけど、私、ここのグリーンベルトで遊んでいたんですね。イチョウの。車全然通ってなくて、誰も注意する人いなかった。あと、すごく遊んでたのが、この公園(国分町三丁目北公園)。多分この公園、市役所の人しか知らないかもしれない、担当の方。ここにあるんですよ。この間行ったら、やっぱりあるんですけど、ビルの谷間

になっていて、でもここすっごくよく遊んだんです。本当に子どもにとってほんの小さいスペースでも、大切な遊び場になるんだと、ちょっとこの機会にさらってみたのですが、改めて感じています。

では、その後、私、東京に来まして、birthというNPOを97年に立ち上げました。まちに緑をふやす活動、人と緑の関係をつくる、こんなまちにしたいなということを目指しています。今日いろいろ資料も持ってきましたので、皆さん、ぜひ後で、birthのパンフなどもありますのでごらんになってください。パークライフマガジンとかいろいろございます。

では、今やっている仕事なんですけど、先ほどご紹介あった一番ちっちゃい公園は15㎡しかない、このぐらいみたいな。一番大きい公園は200haですね。東京ドームの30個以上分ですね。という公園の管理をしていたりとか、あと民有緑地が実は東京ってすごく多いんです。何っていうと、それは畑、雑木林ですね。公有地の3倍以上あるんです。そこを何とか守ろうということで、新しい土地活用の提案とか実践しています。あと街中のちっちゃいちっちゃい緑、中央線の高架下とか、URさんの団地再生とか、そういったことにも関わっています。

さて、そんな中で思うのは、やっぱり緑の力すごいなと思っています。いろいろな力が緑にはあるなと思うのですけれど、この力、もっと伸ばしていけないかなということで、色々なことを取り組んでいます。

まず環境なんですけど、私、公園とか緑地にかかわるのは、自然が大好きだったからなんですけど、公園というのが、もう東京ですと生き物の多様性の最後の砦と言われているんですね。人のにぎわいも大事なんですけど、人だけにぎわっていてもなと思っています、やっぱり生き物がにぎわわなきゃいけないと。だけど、なかなかこういう貴重な動植物って、守るのがすごく難しかったり、大変だったりする。そこで、今、産官学民、いろいろな方々の力を借りて、こういう都内の雑木林とかそういった自然が多いところというのは、必ずパートナーの方々と一緒に管理をしています。

また、今公園の大きな役割として注目されているのがコミュニティ再生の力です。私たちコミュニティガーデンという地域の庭づくりを行っているんですね。1つは三鷹市というところの事例を紹介します。こちらの公園、何かうわあっていう感じなんですけれど、こんな公園、どこにでもあるんじゃないですか。仙台にもあるんじゃないかな。三鷹市も何とかしたいと思ってたんですね。では、住民が集うコミュニティガーデンにしようということでワークショップを始めました。最初はみんな緊張して、また市が何やらせるんだみたいな感じだったのですが、夢を語っているうちにみんな楽しくなってきました、本当にこんなのができるのかなと言って、どんどん何かやっていくうちにできちゃったみたいなね。最初はこうですね。これ。これね、こうなっちゃったんです。大変身。これで終わりじゃないんですね。皆さんここを、8年ぐらい前につくったコミュニティガーデン

なんですけど、毎月必ず1回集まって、ハーブを摘んで、お茶を入れて、お手入れをしてなんていうことをしている。まさに街中の縁側としてすごく活用されている、そんな大切な場所になっています。

もう一つ、コミュニティ再生ということなんですけれど、「あったらいいな」をみんなで作る公園プロジェクトというのをやっています。これ多分、仙台も今すごいことになっていて、これは榊原さんとか皆さんの力が大きいと思うのですが、東京も負けていけないぞということで、いろんな人たちの、要はやりたいことをやろうよということなんです。ではどうやってやっているかという、自由な発想やアイデアを出し合う場づくりというのをしています。私たち、パークコーディネーターという役職がおりまして、コーディネーターが地域のいろいろな方々をプレーヤーを集めて、やりたいことを言ってもらおう。それで、「あったらいいな」をみんなで実現ということで、例えば、絵本100冊寄附してもらったから、じゃあ絵本絡みで何かやろうよと。絵本屋さん集まってくる。農家さんも一緒にやろう。パン屋さんも来る。パークレンジャーも自然解説する。公園を1日絵本の世界にしちゃおうよなんていうプロジェクトをやっています。この「あったらいいな」がもうどんどん「あったらいいな」で埋め尽くされてきていて、公園単独ではできないことを地域の皆さんと一緒に実現するというのが、本当に今大人気になってきております。実はこのプロジェクトは、事業費って私たち全然出してないんですね。これは多いとき、1日二、三千人来ちゃうぐらいのイベントになるんですよ。そうすると、参加者が来るとお金落としていってくれる。しかも、協賛する企業もついてくれるということで、私たち逆にマージンいただいて、そのマージンでこの事業のための備品を買っているみたいな、稼いでいるみたいな、まさに公園、Win-Winの関係ができていくという事例です。

まだ緑の力、いろいろあるんですけど、まだ2つ目なんですけど、時間がもうないので、ちょっと飛ばしていきます。健康づくりというところでは、公園すごく今注目されています。オリンピック・パラリンピックもあって、身近な公園をスポーツ、健康づくりの場として定着させていこうということとか、あと環境教育ですね。パークレンジャーという役職がありますけれど、今、ゼロ歳児からの環境教育やっています。これはプレーパークと一緒に共催しているものなのですが、子供たちがいろんなコスプレをしてもらって、この中を走り回って探検してもらおうという、これも全然宣伝しなくても五、六百人来てしまうというイベントになっています。あと、公園に隣接して美術館があるような公園ですと、こういった美術館との連携でいろいろなアートワークショップをするということで、公園がまちの文化アートの発信拠点になるということ。それから、防災、非常に重要なテーマなのですが、防災訓練、東京は全然来ないのです。おじいちゃん、おばあちゃん、暇だから来たみたいな。これでは困るよねということで、私たちは今、遊べて、学べて、食べて、役立つ防災フェアということで、1日数千人ぐらいの規模で来てもらうようなそんなフェ

スタを自治体さんと一緒にやっけていまして、非常に喜ばれていまして。

最後に緑の経済効果、先ほど三浦さんもおっしゃっていましたが、これが最近すごいですね。これはマンションのつくったチラシなんですけど、このマンション、隣に公園(江東区立亀戸七丁目南公園)があつて、昭和の公園で古いと。それでデベロッパーさんが困つて、自分たちでもうお金出してしまえといつて、開発業者が改修費を区に出して、しかもコミュニティガーデンにしちやおうといつて、コミュニティがつくられて、グッドデザイン賞をとつたといつて、そういうすごい事例なんです。まさに公園というのが、もう今厄介者とか、緑あつてもねみたいなところから、本当に緑の力というのがまちの力をすごくアップさせていく、そんな時代が来ているなといつて、それを日々現場にいて肌身で感じております。

以上、私からの話題提供でした。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

舟引 敏明氏

ありがとうございました。これだけで1時間ぐらい聞いていたいような話ではありますが、残念ながらそれもまいりません。

次は、神戸からはるばるお越しいただきました村上さんにお話をいただきたいと思つてます。

村上 豪英氏

神戸から参りました村上と申します。

佐藤さんの67の公園のお話の後で、本当に何が言えるかわかりませんが、私が担当しているのは、やっていますのは1つの公園だけです。それでも1つか2つでも視点を提供できればと思つてます。

私、会社経営をしている普通の市民ですけれども、やっぱりこつと同じで一度被災したまちですから、まちのことを考えるようなくせみたいなのができています。会社経営の傍ら、神戸モトマチ大学といつて、せもの勝手につくつた勉強会を開いて、学びの磁力によつて人と人がどんどん輪が広がっていくといつて、ちょうど2011年の東日本大震災の直後から始めています。といつて、自己紹介なぐらひですから、私、公園のことは何にもわかつてなかつたんですね。今は多少かかわつていますが、2年前までは、壇上はおろか、ここの会場にいらつしやる一番公園に触れてない方と同じレベルだつたといつて、ふうにお考えいただければと思つてます。

私自身は、先ほどの神戸モトマチ大学とかをしておりまして、まちの中で何をすると一番まち全体がよくなるんだらうといつて、考えることがすごくたくさんありました。市役所の方ともそういうディスカッションを繰り返していまして、今からお話する東遊園地、先ほど舟引先生にもご紹介いただきましたが、この狭い狭い山と海が隣接して

いる神戸のまちのど真ん中、旧居留地という昔、外国の方が専門の場所だった東側にあるから東遊園地という名前の変った名前の都市公園が、こんな状態でほったらかしてたらあかんやないかというふう感じたところから全てが始まりました。ちなみに、特に人がいないときを狙ったわけではなくて、去年のゴールデンウィークのあったかい日の午前11時ぐらいです。掃除のおじさんが1人いらっしやる以外は人っ子一人いない。こんな公園にほったらかしててあかんなど。ここ、本当はコンパクトなまちのど真ん中として、ここがよくなると神戸全体への波及があると思いましたが、都心の価値を高められるレバレッジポイントになると。当然市民としてのアウトドアリビングにできるなというふうで考えまして、ここを日常的に豊かに過ごせる公園にしていくことで、こういった可能性を実現したいなというふうで思いました。

思ったのは、市民の私と仲間ですので、予算ありませんし、神戸市役所に行って、こういうことをしたいんですとお話ししても、げげんそうな顔で見られて、この公園ではあんまり誰も文句をつけてこなかったんやから、できればほっといてほしいと、そっとしておいてほしいというふうで、今だから仲よくなった神戸市役所の方は、当時君たちのことをそう見ていたというふうに教えてください。

真っ先に思ったのは、これは先ほどのグラウンドの手前にある広場の部分ですが、予算1円もありませんので、どないしたらええかなと。やっぱり見た目的に芝生とカフェがあるだけでも大分違うのかなと思って、無理やりつくりました。これですね、話せば本当に長いですがけれども、人からもらったものとかだけで構成されている恐ろしい公園です。やっぱりそうすると、これだけの人が日常的に使ってくださいますし、夜にも人が集まるような公園になりました。

これは2015年、昨年に2週間2回やった社会実験の様子です。この社会実験をして何が一番よかったかという、実験ですので、いろんなことを指標として調べましたが、究極、運営者、関係者と行政、市民が、同じことを体験したと。この様子を見た瞬間に、初めげげんそうに見ていた公園部の方が、神戸市役所の方々が、芝生にしよう。何かちょっとだまされてみて一緒にチャレンジしてみようというふうで思ってくださったのが、本当に今でも覚えている感激的な瞬間でした。

さて、これは2016年、今年のやはりゴールデンウィークです。私たち社会実験終わっていますので、ハトが1羽いるぐらいの悲しい公園でしたが、今度は神戸市役所が、ほな我々で芝生にしたるわと、こうなりました。やっぱり芝生の効果というのは絶大で、私たちは神戸市役所と協力して、この芝生の横で日常的なにぎわいをつくってくださいという事業者に応募し、選ばれました。こういう仮設の構築物をつくって、ここでことしの6月25日から11月6日まで、135日間の社会実験をしています。あと2週間、毎日毎日やっているところです。大きくはアウトドアライブラリーやパークキッチン、プログラム等々とありますが、ちょっと細かいことはさておきまして、こういう音楽を楽しむタベ

ですとか公募プログラムのヨガ、芝生の上で無理やり国際フォーラムをしてみたり、カフェを運営したり。このカフェも、やっぱりちょっと都市のど真ん中の公園ですので、ほかの事例とちょっと合わないかもしれませんが、やはり日常的に人がにぎわうためには、誰かが常駐していることが必須であるというふうに考えまして、本当に雨の、きょうも神戸でも雨が降っています。雨の平日の夜とか人っ子一人いないときも多々ありますが、それでも歯を食いしばって常駐していると。公園のことを皆さんに知ってもらうためのガイドツアーなんかも実施するというのを繰り返してまいりました。

ちょっと余談ですけども、ここでもファーマーズマーケットを定期的を開催しまして、今では神戸というまちも後背地に広い農村地帯がありますけれども、そこと都市部をつなぐような役割を担うファーマーズマーケットに育っています。毎週土曜日に開催しています。

さて、私がやる中で常に考えていることを1点ご紹介します。一体どれだけの多くの人が、この公園を育てる仕組みのほうに参画するのか、そこを常に考えています。これは私が勝手に考えていることなんですけれども、使われていない公園にカフェつくって、スタバ持ってきて、何か音楽イベントを持ってくると。もちろんそれも大事なんですけれども、それよりもそういうステージを自分たちでつくることのほうが、はるかに価値があることではないかなというふうに思っています。ちょっと失礼な表現かもしれませんが、傍観者からスタバと芝生がある程度の公園というのは、消費者が生まれているだけであって、物を買うのにちょっと飽きた人が、ちょっとあんまり金かからんと楽しませてくれる公園へ行って参加しようかというの、マインドとしては消費者ちゃうかと。消費者としての自分も確かに僕自身の中にもあるんですけれども、そのすばらしいまちをみんなで作っていかうやないかという市民としての自分もやっぱりいるんじゃないかなと。公共空間というのは、どうしても何してもいいというわけではなくて、ちょっと自分の振る舞いとかに気をつけないと、公共空間の価値自体をちょっと損ねてしまうような怖い場所でもあると思っています。逆に言うと、ただそこで楽しくピクニックするだけでも公共空間の価値を高められることができるんですね。そういう目線を育てられるのが公共空間ではないかなというふうに思っています。

そのために、つまり公園を育てることにどれだけ多くの市民が参加できるかということ、を常に考えているので、いろいろな取り組みをするのですが、一番自分の中で力を入れているのは本。アウトドアライブラリーの仕組みです。本があるだけで、こうやって交流がどんどん生まれていくんですけれども、この本は、全て市民からの寄贈で成り立っています。1人1冊限定でお預かりしています。本幾らでもええからたくさん持ってきてというと、皆さん本棚の中から要らん本を何十冊でも持ってきてくれるんですけど、そういう思いのこもっていない本は要らんと。そうじゃなくて、何か1冊だけ持ってきてくださいというと、皆さんプライドにかけて、自分の本棚から10番目ぐらいに好きな本を持って

きてくれるんですね。10番目ぐらいです。しかもその本を選ぶのも自分たちでやらずに、本棚オーナーという方々をまず募集して、この方々に集めていただきました。そうすると、本が1冊集まるたびに思いが集まるし、公園を育てるプロセスにちょっとだけ参加してくれる。そういうことを試したというふうに思っています。

あと、この先ちょっと駆け足でいきますけれども、例えばこんなガーランドも、黄色と白と青のTシャツ持ってる人くれへんかないうて、それで集めまして、ミシンでこそこそやるんですね。こんなもうほんまに買うたら安いなと思うんですけど、やっぱりこの一つ一つで私も参加したと思ってくれる人がいることのほうが価値があると思ってやっています。

公園で行われるプログラムも、集客力がさほどあるとは言いませんが、詩の朗読会みたいなロマンチックなことをして、朗読するだけで皆さんが主役と。なるべく主役が多くなるようなプログラムをしまして、これね、実はすごく僕好きなプログラムなんですけど、楽器に触れる東遊園地といいまして、皆さんに楽器持ってきてもらうんですね。そうすると、楽器持ってきただけで主催者側に回れる。ハーモニカ1個持ってくるだけで、それを子どもが楽しむ、カスタネット1個持ってくるだけでも楽しめると。楽しませる側にいかに簡単に回れるかということテーマにプログラムを考えています。そうしていると、勝手にシャボン玉持ってきて、皆さんを楽しませてくれるお兄さんがあらわれたり、勝手にアコーディオンを持ってきて、弾いてみんなを楽しませてくれるお姉ちゃんがあらわれたり、勝手にフラダンスを踊ってみせてくれる人があらわれたり、いろんなことが起こっていきます。

そこをポイントに活動しておりますが、これからは、プログラムを充実させたり、舟引先生がおっしゃったようにエリアマネジメントを目指していますので、そういう組織をつくったり、やっぱりハード面の充実が大切ですので、その整備をスタートしたいと思っています。この辺は常に、今では仲よくしてくださっている神戸市役所の方とパートナーとして頑張りたいと思っています。ありがとうございました。(拍手)

舟引 敏明氏

どうもありがとうございました。おもしろいですね、本当に聞いてて、観客になっております。

では、地元代表の榊原さん、負けないでください。負けたほうがいいのかな。よろしくお願いします。

榊原 進氏

都市デザインワークスの榊原です。

「パブリックスペースを楽しむ」というタイトルにさせていただきます。今話を聞いて

いて、ここに「勝手に楽しむ」と入れたいと思いました。

都市デザインワークスは、市民、行政、事業者の間に立って、それぞれの立場を超えたまちづくりを展開するため3つの柱立ての事業を行っています。その中でも中心となるのが、「せんだいセントラルパーク」です。広瀬川周辺、スライドはニューヨークのセントラルパークと同じスケールですけれども、広瀬川周辺にあるいろいろな公園、キャンパスなどオープンスペースがあり、そこを仙台のセントラルパークと見立てて、その魅力を発信するため様々な活動をしております。

東西線が通っていたり、高層ビルの夜景がすぐそこに見えるようなところで何百万年前もある地層が現れていたり、仙台城址があったり、深い歴史が積み重ねの上に今があるエリアです。追廻には「熊出没注意」なんていう看板があり、驚きです。地元町内会の方々が管理している広瀬川沿いの散策路やケヤキ並木が美しい青葉通もあります。本当に四季折々の豊かな自然があります。こういう杜の都を代表するような資源が沢山あって、そこで多彩な活動をしている人たちもいます。

せんだいセントラルパークは、まだ僕らが学生のころから20年近くやっている活動です。振り返ると、まずは、研究室での調査研究の成果を「都市デザインガイドブック」という書籍にまとめ、2006年に出版しました。今日もせんだいメディアテークのKAN E I R I ショップで販売していますので、ぜひお手におとりください。「S e n d a i C e n t r a l P a r k」というホームページも立ち上げています。せんだいセントラルパークの魅力やビジョンを提示したり、皆さんに足を運んでもらおうと、エリアのミュージアムや公園などで行われるイベント等のスケジュールをまとめて表示し、ここに、いつ、どこで、何をやるという情報を入れていたりしています。あと片手で持てるマップを作成したり、広瀬川を眼下に臨む市民会館ロビーを会場に、せんだいセントラルパークについて、市民の皆さんと対話できる場にしようと、今日も会場にあるせんだいセントラルパークの模型を置いたり、パネル展示したり、ガイドツアーなども行う展示会も開催しました。

2012年ぐらいから、「パブリックスペースを楽しむ」ということを実践的に現場で取り組んでいます。「楽しい」というとにぎわうイメージがありますが、いろいろな楽しみ方があるのではないかと思います。「楽しむ」ための5つのキーワード、1つは「佇む」です。今日も会場にハンモックを置かせてもらっています。2つめは「知る」で、いろんな知的財産、歴史、史跡もありますし、美術館、博物館等、キャンパスもあります。知的好奇心を刺激されることを楽しむことができます。また「集まる」ということもありますし、「食」もキーワードになります。例えば広瀬川でも捕れたモズクカニを「食べる」とか、あるいは個性的なカフェ等があります。5つ目は「巡る」楽しみです。

パブリックスペースは、市民目線でいくと、公園だけでなく、広瀬川、道路、民間の公開空地などもパブリックスペースと認識しており、かかわる法律や区域などは関係なく、どう使っていけるかが重要です。スライドは、これら主なパブリックスペースの管理区分

とそれを市民が利用する場合の諸手続を整理したものです。不特定多数の人が参加するイベント等の会場として利用する場合には、それぞれの所管課に対していろんな手続きが必要です。公園については、使用（行為）許可が必要です。例えば、西公園で何かイベントをやる場合は、都市公園法の決まりにのっとって、青葉区公園課に届け出を出して、了解を得る必要があります。河川は、河川法に基づいて、河川敷使用届が必要です。ふだん仲間で芋煮をやる程度では要らないのですが、不特定多数の人が参加するようなイベントをすると必要になります。道路が一番厄介で、道路占用許可は道路管理者である、市道であれば区道路課に許可をお願いします。さらに、道路使用許可は交通管理者である警察に許可を得なければなりません、この許可をとるのがかなりタイトなのです。また公開空地というのは、建築基準法の総合設計制度を活用して一般に開放されたものもありますし、普通に一般に公開しているところもあります。そこをイベントで使わせていただく場合には、所有者に対して任意にお願いして許可を得ます。さらに、これらパブリックスペースを会場に不特定多数の方に飲食物を提供・販売する場合には、仮設飲食店営業許可というのを保健所でもとらなければいけないというのが出てきます。できればこの許可をとらずに日常的に自由に利用できることが理想です。そのためには、その維持管理にも、使ったんだったら自分たちでちゃんと管理しましょう、行政に苦情を言うのではなくて、市民もパブリックスペースの維持管理に関していく必要があると思います。

パブリックスペースを実際に使ってみようということで、都市デザインワークスのスタッフが中心になって色々実践しています。その一つがピクニックです。月1回、ランチの時間帯に、パブリックスペースでちょっと気軽にランチしましょうと、ツイッターで呼びかけています。ランチは持参、買ったり、つくったり自由です。例えば、西公園では、普通にちょっとラグを広げてただ弁当を食べているというただそれだけです。冬の雪の西公園でもちょっとやってみましょうということで、温室をつくってみましょうとか、緑水庵という茶室と日本庭園がある公園では、ピクニックに参加した造園家の方に庭園について解説をしていただいたりします。定禅寺通の緑地は、道路ではなくてあそこは公園扱いになっていて、何度かピクニックの会場で使っています。冬もちょっとやってみましょうとハンモックを置いて、これもランチの時間に使っています。

また、広瀬川では、大人でも広瀬川を楽しもうとインストラクターにお願いして、有料で、大橋付近を会場に安全に楽しむための講座を行いました。これは河川敷使用許可をとって行いました。中心部を流れる広瀬川は、本当に清流で、魚やカニを観察でき、本当に楽しかったです。

スライドは、せんだいメディアテークの1階がオープンになった10月の様子です。実は明確にわからないような形で道路と公開空地の境界があります。道路との境界ギリギリまで使って公開空地を使っている、道路の使用許可と占用許可をとる必要がないです。この境界ラインが重要です。

ここは仙台市で初めてできた公開空地です。総合設計制度によって公開空地をつくることは容積が割り増しになります。文字通り公開空地ですので、誰でも自由に使っても良いので、ちょっと集まって使ってみました。フォーラスの屋上もちょっと使わせてくださいとお願いして、真夏のピクニックをしました。これがきっかけかどうかわかりませんが、次の年からは、フォーラスではビアガーデンが始まりました。また、屋上でいえば、西公園前にあった取壊直前のビルで、壊される前に屋上でピクニックさせてくださいとあって夕日を眺める会です。

橋も使ってみました。これは大橋です。これは道路占用許可を得て「7月7日、全国一斉MIZUCAN 水辺で乾杯」というのもこんな感じでみんなやってみました。

そんなふうに勝手にオープンスペースを使っていると、色々な人がおもしろがってかかわるようになってきました。せんだいセントラルパークの魅力的な資源や空間を「楽しい」に変えるのは「人」が重要だということに気づきました。空間があるだけではなくて、そこに誰がどんなことをするのかということと、ピクニックの活動を通じて、色々な方たちとつながって、一緒に楽しみ方をつくって、より多くの方にも提供していくということができないかと考えました。都市デザインワークスは、市民、行政、民間事業者の中間に立っていて、様々な人が関るような場をつくるのは得意で、せんだいセントラルパークをフィールドに、色々な人が活躍できる企画を作ろうと始めたのが「ピクニックパレード」です。去年、東西線が開業する前に国際センター駅をメイン会場に開催しました。1週間の期間に、せんだいセントラルパークを構成するパブリックスペースで、多彩な市民団体の人たちが、自ら企画したプログラムを一般市民に提供します。有料のプログラムもありました。これは西公園で夕日を眺めましょうというただそれだけですが、西公園に置いたハンモックに寝そべって、沈んでいく夕日をみんなで見ました。時間とともに、空の色が美しく変化し何とも言えない時間でした。その他、専門家や愛好家の方がガイドになって、まち歩きガイドツアーも幾つか行いました。これも東北大学キャンパスやの植物園を巡るツアーや、西公園を巡るツアー、広瀬川に掛かる橋を土木の先生がガイドになって橋のマニアックな話をしてもらったツアーなどもありました。一緒に歩かなければ分からないモノばかりで、すごくおもしろい企画でした。広瀬川では、インストラクターの方の指導を受けながらボートで川下りもしてみました。

この「ピクニックパレード」は、プログラムを提供する方も、参加する方からもっとも前向きな感想をいただきました。その後、人を介して空間の魅力を体験してもらうことを日常的にできないかということで、せんだいセントラルパークで体験できるコトを日常的に提供するような企画に挑戦しはじめました。それが「プレジャーマーケット」です。今年5月から毎月最終日曜日に開催しています。プレジャー (pleasure) は「楽しみ」の意味で、楽しみをマーケットで売ることがコンセプトです。基本的には、体験型ワーク

ショップやガイドツアーなどの体験をしていただき、手づくり雑貨やお菓子などの販売もしています。ちょうど今週末も、国際センター駅を主会場に開催しますので、是非お越し下さい。体験メニューとしては、DIY の家具づくり、本の読み聞かせなど屋内でできるものもあれば、屋外では、例えば、追廻は、かつて馬を追い回していた場所でそれが地名に残っていますが、乗馬体験プログラムを用意したり、広瀬川でサップ（SUP:スタンドアップパドル）体験もしました。その他沢山あります。また、国際センター駅2階の青葉の風テラスで、逆に非日常的な使い方をできないかということで、新郎新婦の依頼を受けて結婚式を企画開催もしました。

最後に告知です。道路を使ってみようというイベント「青葉通りピクニック」を11月13日に開催します。青葉通りは、歩道部分を拡幅工事したけど、具対的に使えないかということで、沿道のお店に参画してもらいながら、屋台を設けたり、椅子やテーブル、ハンモックを置いてみようと企画しています。当然、道路占有許可と道路使用許可を得てやりますが、交渉中です。是非、お越し下さい。

これで終わります。（拍手）

舟引 敏明氏

ありがとうございました。時間管理を全くする気がありませんので、長くても構わないのですが。

いよいよ岡田さんの番になってきました。げげんそうな顔をしてたり、たくさん判子を押さなきゃいけない立場の岡田さん、お話を聞いて、いかが、ご感想をお聞かせください。

岡田 真之氏

今、お三方からお話を伺いまして、皆さんの活動、公園の管理運営の先進的な事例として、私も色々なメディアを通して存じ上げてはいたのですが、今こうやって直接お話を伺って、改めて楽しいなというのですかね、本当に参考にさせていただけるなというような気がいたしました。

舟引先生のお話の中にもありましたけれど、今、仙台市でも公園のマネジメントの方針をこれからつくろうとしています。その上で非常に参考になる事例だなというふうに感じております。

最初の佐藤さんのご活動でございますけれども、やっぱり印象に残ったのは、「パートナー」という言葉。我々もその公園をできるだけたくさんの人に使っていただきたいという思いはあって、どうやって人を呼び込もうかということに腐心をするわけですが、佐藤さんの場合はパートナーという形で、単に公園を使ってもらおうという視点ではなくて、一緒に楽しむんだ、一緒に運営していくんだというような視点で、そういう形でたくさんの人に集まってきてもらっている。これは本当に重要な視点だなというふうに改めて感じ

ました。

それから、村上さんの東遊園地なんですけれども、実は私、この週末にプライベートな用事で神戸に行きまして、このフォーラムもありましたので、これは東遊園地に行かないわけにはいかないということで、ちょっと顔を出してみたんです。非常にいい公園で感動したんですけど、まず本当に神戸の三宮のすぐ近くで、神戸のど真ん中にある公園なんですけれども、結構面積もあって、まさに都心のオアシスみたいな感じで、主旨説明にもありましたけど、存在効用だけでも非常にいい公園だなというふうに感じたのですが、それ以上によかったのが、やっぱり人がいるということですね。それも、仙台でも勾当台公園なんかでいろいろなイベントをやって、たくさん利用者の方に来ていただくことはあるんですけど、東遊園地の場合は、ちょっとその雰囲気違って、公園に来ている方がそれぞれの楽しみ方をしているというのですかね、それぞれ自分のやりたいこと、芝生で遊んでいる親子連れもあれば、アウトドアライブラリーでしたか、本を読んでいる方とか、あと卓球をやっている人とかがいたりして。ちょうど私行ったときにガイドツアーなんかもやっていただいていた、私も実は参加させていただいて、ここの写真にも出ていましたけど、女性の方でした。若い女性の方に案内してもらったりしたんですけど、本当に公園の持つ人を集める機能というのか、そこで人が触れ合う、関係を持てる、そういう機能が公園にはやっぱりあるなというのを改めて感じた東遊園地でした。

それから、榊原さんですけども、いつもお世話になっておりまして、実はきょうも私も、青葉山公園の公園センターというのを今計画しているのですが、その懇話会の委員にもなっていて、実はきょうの午前中もいろいろご意見を頂戴したところです。まさに先ほども仙台のセントラルパーク構想というようにお話もちょっと出ていましたけれども、青葉山もその中に入るといって、非常に仙台市にとって重要な場所なんだよとか、あと、どういうふうにご利用をしてもらうのがいいんだよというようにいろいろなアドバイスをいただいていたところでした。これからもよろしくお願いしますということです。

ちょっと長くなってしまいましたけれども、いずれにしても今お話を伺った3名の方、3つの事例ですね。やはり共通しているのは、人を見ているということ。それから、視点が公園の中ではなくて公園の外に向いているということ。我々、ともすれば施設整備というようなことが頭に浮かんでしまって、公園の中しか見ていないというようなことにも、そういった傾向もあるように思うんですけども、やはりあくまでも人を見る、それから公園の外を見ていくというのは、これから我々もしっかりと心がけていかないといけないなというのを改めて感じました。

舟引 敏明氏

どうもありがとうございました。2つの意味でありありがとうございました。パネラーの話

をまとめるのは私の仕事だったような気がしないでもないですけど、そこは省略しましたので。

私の話の中でもちょっと言いました。ちょうど榊原さんがいろいろなところを使うにはいろいろ許可が要るんだという話をしてましたけれども、道路とか河川というのは、もともと中で人が遊ぶようにはつくってないんです。だから、カフェをしようという、本当にとっても大変なんですけど、公園はさっき説明したように、最初から茶店があるわけですよ。だから、できるんです。けげんそうな顔をする人はいるかもしれませんが、最初からできるということがあります。これはかわりに言いわけをしておきます。

皆さん実はそれぞれ、あ、僕それ要らない、それ要らない、お立場が違うんですね。佐藤さんは指定管理者という立場ですから、役所になりかわって公園の管理をみずからやっているという非常に楽しい立場。これは、ここはちょっと仙台市に苦情を一つ言うと、仙台市も指定管理者を導入しているんですけど、大きくお金のとれる公園だけしかやっていない。東京都はそうではないですよ。もっと幅広く、こういうおもしろい管理をする人たちに指定管理者を投げています。大分時間がたっていますが、ちょっとだけ私の質問をして、あと、さっき言い足りなかったことをそれぞれ5分ずつぐらい述べていただきたいと思います。

まず佐藤さんには、公園の指定管理者の楽しい話はいっぱいありましたけれども、それ以外の小さい公有地を活用するとか、市民、民間の人たちが持っている緑を活用して楽しむとかという話もちょっとされてましたよね。あの辺、ちょっと仙台市の方にご教授していただくとおもしろいんですけど、いかがでしょうか。小さいのだとか、公園以外のさまざまな緑のところをどうやって遊ぶかというような話。

佐藤 留美氏

今、東京って本当に土地がないので、ちょっとしたスペースでもすごく重要なんです。私たちがやっているというところだと、JRの高架下というところが高架、暗くて、ちょっと危険だなというイメージがあるところを、今JRさんが、結局沿線を楽しくしないと人が集まってこないわけですよ。ですから、それでそこを緑道にして、地元のお店を入れて、かつお店を入れるだけではなくて、その緑を配置していく。その緑もただの緑ではなくて、先ほどご紹介したコミュニティガーデンのような形で地域の方にかかわってもらって、それでやっていくというところがすごく増えています。そのためには、行政と市民とで直でやっていくとすごく難しいところがあるので、やっぱり私たちコーディネーターとして入っていくんですけど、行政の気持ちもわかるし、それから市民の気持ちもわかるというところでのその間のところをうまくつないでいくというそういう中間的な役割というのが、これからオープンスペースを活用していくためには絶対必要だなということを感じております。

その小さいスペースでいいますと、江東区がすごく頑張っています。江東区って皆さんイメージとして、もうほんと都心のビル街って、マンションいっぱい建ってるみたいな感じなんですけれども、すごく熱心な行政マンの方がいらして、一緒にやっているんですけど、その方は、本当にちっちゃいちっちゃいスペースをポケットエコパークという形で生き物が住めるような場所にする。さらに市民の方々にネイチャーリーダー講座というのをしまして、そこで育った方々がNPOとして自立して、そこの管理も請け負っていくというような形をとって、とてもうまくいっています。江東区のようなところでもアカガエルとか本当に貴重な絶滅危惧種が戻ってくるということがわかりまして、やっぱりそういう緑のというか、緑地の可能性というのは無限大だなというふうに感じています。本当にちっちゃなスペース、私たちは15平米やっていますが、どうしようと思うのですが、結構おもしろいことができるかなと思っています。

舟引 敏明氏

1つ。そういうところのファシリテーター、スタッフというのは、どうやって養成しているのですか。

佐藤 留美氏

とにかくコーディネーター、大変な仕事なんですよ。あっちから押され、こっちから押され、もうずっと中間管理職みたいな感じなんですけれども、やっぱりもまれながら育っていくというところもありますし、あと、コーディネーターというのは、もう欧米で必ずいますね。ニューヨークでも、イギリスでも、そういう役割の人たちが中に入ってやっている。そういったところにも私たちコーディネーター役のスタッフは、海外研修も実は行っています。モデルは外に今のところある。日本でモデルになりたいなと思っています。

舟引 敏明氏

やっぱりプロフェッショナルがいないとだめだということですね。

では、次に村上さんに1点お伺いしたいのは、いろいろなことを思いつかれていますね。あれは誰がどうやって思いつくんですか。ちょっと僕らは発想しなかったようなことがぼろぼろと出てきて、ちょっと感動してたんですけど。

村上 豪英氏

ちょっと違う答え方になるかもしれないんですけど、この公園は、本当に神戸のど真ん中で、もともとはその周りに人がそんなに住んでなかったエリアなんです。そういう意味では地域のほんと近い住民のための公園というよりは、神戸全体のシンボリックな公園という位置づけが大きいので、実は今、ここの公園をよくしようという取り組みにかかわ

ってくれている人たちというのは、神戸中から、オール神戸みたいな感じがかかわってくださっているんですね。実は今、ひょっとして仙台にも同じことが言えるかもしれませんがけれども、神戸というところは、震災の後20年ぐらい借金まみれで、全く行政がまちに出て、まちづくりとかにかかわれなかったまちです。関西の中でも神戸は特殊で、行政がずっと力技でまちづくりにタッチしてきたところで、そのメインのプレーヤーが1995年以降すっぽりまちからいなくなった。その中で、いないものはしょうがないので、民間がぼこぼこぼこ俺たちでまちをよくしようという動きが出てきてたんですね。20年間かけて、その育ってきたところに行政がようやく借金を返して、まちのメインプレーヤーとして戻ってきた。なので、今実は20年たってなので、絶望的に長い時間たってからなんですけど、今神戸はすごく市民と行政と一緒に何かつくろうという機運に満ちています。その機運に満ちている、本当に自分たちでまちが変えられるんだというふうなフラッグシッププロジェクトみたいに東遊園地のことを思ってくれている人が多いので、この公園をよくする仕組みをぼしゃる、これがぼしゃってしまったら、せっかくの神戸の新しい芽がなくなるから、俺たちも手伝うよという人がいっぱいあらわれて、ほんと僕にも想像できないようなたくさんプロジェクトを仕掛けてくださっています。

舟引 敏明氏

ありがとうございます。

どんどん時間が過ぎてしまっていますが、榊原さん、最初に言った、ほとんど20年間ブラタモリをやっているわけですよね。そのコツみたいなものはありますか。

榊原 進氏

まず一つは、好きということでしょうか？僕は仙台出身ではなくて静岡出身で、東北大でこっちに来てから今仙台での生活のほうが長く、もう24年たっています。嫁さんもこっちですし、第二のふるさととして考えていて、やっぱり仙台のまちが好きだというのが一番大きいと思います。あと、周りでそういう人たちがいっぱいいるんですね。自分も好きだということと、何か本当に楽しそうに活動されている、本当は裏ではつらいこともいっぱいあるんだろうけれども、楽しそうに活動されている人たちもいるし、そういう人たちと一緒に何かやれることが楽しいというところもあるということですね。じゃないと、多分続かないと思います。

舟引 敏明氏

やっぱりさっきの橋マニアみたいな人っていっぱい集まるんですか。

榊原 進氏

マニアな人たちだと思うんですよ。僕も含めてみんなマニアだと思うので、そういう方たちが勝手にどんどん動いているので、そういう人たちが活躍できる場をどこに求めるかというか、つくってイけるかというところかなというふうに思います。

舟引 敏明氏

ありがとうございます。

さっきの話で一番よかったのは、ユーザー目線でいくと、公園であろうが、道路であろうが、河川であろうが、公開空地というかたいことであろうが、建築空間であろうが、全く変わらないというところなんですけど、多分こっちの行政の人から見ると、全部セクションが違って、みんな違うロジックで管理をしているというところが、行政側では一番難しいところではないかと思いますが、その辺の壁は越えられるんでしょうか。一番難しい課題を振ってしまいました。

岡田 真之氏

今日の会場にも役所の方、関係の方いらっしゃるみたいですが、確かにおっしゃっているように、利用者の方からすると、行政のセクションというのは余り意味のないものであろうかと思えます。ただ一方で、我々もその行政の仕事を効率よくやっていくという点では、やはり一つ必要な部分もあるということはおわかりいただきたいと思えます。

ただ、やはり今日のこのフォーラムの目的ですけれども、公園をどう使っていくのか、まちをどう元気にしていくのか、そういったことを考えたときに、そのセクショナリズムというのが壁になっているというのは確かに、我々も実際に認識はしているところです。それは、これからいろいろなその仕組みの部分で、少しずつではあるかもしれませんが、改善はしていく余地はあるのかなというふうには思います。

舟引 敏明氏

非常に真面目なお答えをいただきました。大体、多分想像をしていたぐらいかたいお答えなんですけど、前半のお三方、皆さん聞いて、みんなおもしろがってやっているという、自分がまず第一に楽しむ、ですよね。そうすると周りの人がおもしろがってついてくるということですので、やっぱり仙台市の方が、まずみずからおもしろがるというところからスタートしないといけないのではないかと思うんです。

ポイントは、自分が遊んで楽しいかどうかというところに尽きるんだと思いますが、かなり時間も過ぎてきたので、もしこのあたりで、せっかくこの東京と神戸から来られているので、会場の方から演台のパネラーにご質問がありましたら、このあたりでいただきたいと思えます。

事務局（司会）

それではせっかくの機会ですので、1名か2名になってしまうんですけども、基調講演とかパネルディスカッションを通して、ぜひお聞きしたいことがあるという方がいらっしゃいましたら、担当がマイクをお持ちしますので、挙手をお願いします。

会場から

市内に住んでいるマハタと申します。

百年の杜というイベントの話でいろんな話が出てましたけれども、大体費用対効果とかイベントとあって、どうしてそれが公園でなければならないのかという説明が全然ないんですね。

地下鉄沿線のにぎわいを求めるのも、みんな外部に委託して、宮城県以外の方が応募して企画しているんですね。地下鉄沿線の「地下鉄」という部分を、「地下」の部分を外してしまって、地上部分から緑を大分減らしたんですね。百年の杜と言いながら、緑を減らしていく話と公園をイベントに使って、静かさとか、自然、先ほど多様性の話もありましたけれども、カエルまで、蚊までいなくなってしまう公園をつくって、どこがおもしろくてイベントがいいのかというのを教えてほしいんですが。

舟引 敏明氏

では、一般論の話で言うと、仙台市の公園、たくさんあります。熊も出ます。全部が全部遊んでいるところではないです。セントラルパークの榊原さんが多分一番よくご存じかと思いますが、その中でどうやって市民がみんなで楽しめるところにするか。役割をやっぱりそこ、公園の中にもきっとそれぞれ違う役割のものがあるんじゃないでしょうか。

もともと緑は大切だとか言ってますけれども、仙台に住んでいる人、ここだってみんな昔は森だったりしたんですね。そういうところに都会をつくって人が住んでいるわけですから、緑も大切ですけども人も大切、そういうふうになまいぐあいにもいろいろなところで仲よくやっていくということが大切なのではないのでしょうか。

佐藤さん、お願いします。

佐藤 留美氏

では、私からも、今お話をお聞きして、すごくお気持ちわかります。私も自然保護を目指して実はこの仕事をずっとしてきているんですね。ただ、自然だけ見ていると自然って守れないなというのも事実、すごく感じていて、それで今のようないろんな活動をしています。

やっぱりどんなきっかけがあっても、人が自然にとか、緑とか、例えば公園が気持ちい

いなとか、オープンスペースがあってよかったな、このまちに住んでよかったな、このまちはやっぱり緑が多くて、だからいいんだなって思ってくれる人が一人でも増えれば、やっぱりそこを大事にしていってくれて、結果としてそこに生き物が住みつくようなそういう環境がつかれると思っているんですね。だから、人がにぎわうだけではなくて、生き物もにぎわえる、その両方を両立させるためのきっとそういう方法があるなと思って、今そういう活動をしています。

舟引 敏明氏

ありがとうございました。

他にどなたかございますか。

会場から

すいません、ササキと申します。仙台の西公園のところで西公園プレーパークという活動をしています。新宿で勤めていまして、フレックスタイム使って今来ました。

本当に村上さん、すいません、佐藤さんのところが聞けなかったのですが、村上さんのお話、すごく刺激的でした。

西公園で今土俵をつくっていまして、土俵をつくっていたら、今東北大の相撲部の人に来てくれて、手伝ってくれて、そうしたら生け花の先生が「相撲場の周りにうちの庭にある野草を植えてもいい」なんて言ってくれて、ちょっと広がっているんですけども、杜の都というのは、もともと杜はみんなが杜を大切にするというふうなまちづくりから来ていて、多分そういうDNAがもともとあると思うんですけども、だからこの参加するとか、市民が参加するということに対する可能性も、既にお話ししてもらったんですけども、そこについて杜の都の可能性についてということでお話をしてもらえるとありがたいなと思います。とりとめもないかもしれませんが、よろしくお願いします。

村上 豪英氏

もう既に西公園で随分ご活動されている方に言えることはわからないんですけども、やっぱり参画できる方法論というのは、たくさんメニューとして出してあげたほうがいいとは思うんですよね。そのつくってみたメニューに一旦参画した方が、すぐに、「いやまあまあおまえの言うとおりのこのプログラムで参加したけど、もうちょっとこうしたほうがいいんじゃない」というのをすぐにおっしゃいます。その中から多分、次のプログラムも生まれるのかなというふうに思います。

やっぱり公園を見ていると、毎日見ていると、公園に来て、思い思いに過ごす、素敵に過ごしている方というのは、実はすごいハードルが高いものを超えているんじゃないかなと思っていまして、やっぱり大多数の方は、公園に行って何したらいいのかわからないと

か、特に目的もないのに公園に行くということが想像できないという声を実はすごく聞かれますよね。いつか自由に使っていただきたい、いつか主体的に公園をよくする側に回ってもらいたいと思いつつも、やっぱりまずハードルを下げた参画のプログラムは多ければ多いほうがいいのかなというふうには思っています。

舟引 敏明氏

ありがとうございました。

1個だけ条件が違います。関西の人はうるさいですよ。何かイベントやると、わあわあ文句も言うし、意見言う人が山ほどいますけど、仙台の人は結構紳士淑女がたくさんいて、結構おとなしいので、ここを盛り上げるにはちょっともう少しノウハウが要るかもしれません。

もう一方ぐらいお時間ありますけれども、いかがでしょうか。

会場から

佐藤さんにお伺いしたいのですが、子どもの遊び場づくりの活動をしていますネモトといいます。

結構小さい公園でも活動されていますけど、まちの中の公園だと、近所の方のいろいろなご意見とかあると、やっぱり意見を聞いてもなかなかぶつかり合って、無難なことしかできなくなってしまうということがないかなというふうに思うんですけれども、そのあたりどうなんでしょうか。例えば、大きい声を出したりする子どもが遊べる公園とかというのは、できたりするものでしょうか。

佐藤 留美氏

その問題は、すごくどこでもあるなと思うんですけれど、やっぱり公園って一つ一つ個性があるんですよね。その個性に応じた公園の管理とかマネジメントというのがあって、思っています。その個性の中には、その周りに住んでいらっしゃる方々とか、環境とか、学校が近いとか、いろいろあるので、まず私たち公園管理に入るときは、それをまず調べます、すごく。あと1年ぐらいはPDCAといってPDCAの部署がありまして、全部の意見情報というのを集めます。武蔵野地域の公園、12公園を管理していたときは、年間3万件ぐらいの意見情報が、苦情も感謝の声も全部集まるんです。それを分析するんです。それによって、その公園で何をしたらいいのか、どういうことが求められているのかというのがすごくわかってくる。と同時に、やっぱり対立することってというのはあるので、例えばなんですけど、私たちやっていた公園の中でトラックがある、スポーツの。それは懇談会を開きまして、トラックを使いたい、全速力で走りたい人たちと、そこで幼稚園とか保育園のお遊戯をやりたい、正直スポーツ公園ではないんですよね。なのにトラック

があるので、すごく大変だったんですが、一緒にそれはお互いの話を聞いて、またそれぞれの話を、ぶつかり合うような場をつくったり、そういう中で理解をし合っていくような、まさに場づくりなんですけど、そういったことはすごくやっています。最近ではトイレワークショップというのをやりました。トイレをテーマに住民の方々とどんな公園のトイレがいいのかとか、あとは対立軸にあるようなもの。雑木林があるところだと野鳥派と植物派では管理の仕方が全然違うんですよね。それを客観的にそのデータを積み重ねて、皆さんと一緒に調査をして、何でここが野鳥のための場としていいのかとか、よくないのかとか、そういったことをお互いに話し合う場づくりというのをすごくやっています、それが一つ大きなトラブルにつながらない、逆に行政の方々が感謝される。普通行政の人って批判ばかりされる。私、指定管理者になって初めてわかったんです。NPOで10年やってきて、初めてその指定管理者になったときに、行政の人大変だなと思ったんですよ。だけど、行政の方々がそういう場をつくって市民とつながる、対立軸ではないところで話し合うことによって、「行政の人たちありがとう」と言われて、皆すごいにこにこ喜ばれるんですね。そういう場をつくっていくってすごく大事だなというふうに思っています。よろしいでしょうか。

舟引 敏明氏

ありがとうございました。

本当にそうなんですよ、皆さん。文句言うのは簡単なんですけれども、反論できなくて悶々としている、ねえ岡田さん。

ただ、今のお話は本当にそうで、やっぱりそんなことを聞いて、聞きっぱなしでやだなと思ってはだめで、それをちゃんと分析をして、コミュニケーションをしていかないと結局はだめだという極めて当たり前の結論になるんです。これから時間が来たので、締めなければいけないのですけれど、私をこのステージに上げた以上、仙台市に注文をしておきますが、役所の人のみずから公園管理の前線でおもしろがるような指針をつくってくださいね。大丈夫でしょうか。(拍手)

というところで時間となりましたので、せっかくの楽しい会合でございましたけれども、閉じさせていただきたいと思います。

パネリストの皆様には大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

事務局 (司会)

皆様ありがとうございました。時間が過ぎるのは早いもので、もうこんな時間になってしまいました。まだまだ聞きたいところではあるんですけれども、これにてパネルディスカッションのほうを終了とさせていただきます。

それでは会場の皆様、もう一度、パネリスト、ファシリテーターの方々に大きな拍手を

お願いいたします。(拍手) ありがとうございます。

事務局 (司会)

これもちまして、平成28年度百年の杜づくりフォーラムの一切を終了とさせていただきます。本日はお忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。

お帰りの際はお忘れ物などございませんようにご確認をお願いいたします。

最後になりますけれども、受付でお渡しいたしましたアンケートのほうに、例えばどこの公園でどんなことをしてみたいか、今日のフォーラムを受けてですけれども、皆様のご自由なご意見のほうをご記入いただければと思います。ご記入いただいたアンケート用紙と鉛筆のほうは受付にて回収いたしますので、よろしくをお願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。(拍手)